

## 「源氏物語と能」

### 能の素材としての源氏物語

#### 世阿弥『三道』

一、女体の能姿。風体を飾りて書くべし。是、ことに舞歌の本風たり。其内に於きて、上々の風体あるべし。あるひは女御・更衣、葵・夕顔・浮舟などと申たる貴人の女体、気高き風姿の、世の常ならぬかかり・よそをいを、心得て書べし。……

かやうなる人体の種風に、玉の中の玉を得たるがごとくなる事あり。如此の貴人妙体の見風の上に、あるひは六条御息所の葵の上に付崇り、夕顔の上の物の怪に取られ、浮舟の憑物などとして、見風の便りある幽花の種、逢ひがたき風得也。……

### 源氏物語を典拠とする能

#### ① へ夕顔

作者不明。三番目物。観世・金剛・喜多流の現行曲。「夕顔」巻を典拠とする。豊後の僧が都を訪れて、河原院の旧跡で出会った女から夕顔の物語を聞く。僧が夕顔の回向を行っていると、夕顔の霊が再び現れて舞を舞い、成仏できたことを喜ぶ。

#### ② へ半蔀

内藤藤左衛門作。三番目物。五流の現行曲。「夕顔」巻を典拠とする。雲林院の僧が夏安居で立花供養を行うと、女が現れて花を手向ける。女の言葉に従って僧が五条あたりを訪れると夕顔の上の霊が現れ、源氏との思い出を語りつつ舞を舞い、やがて姿を消す。

#### ③ へ葵上

作者不明。近江猿楽の能。四番目物。五流の現行曲。「葵」巻を典拠とする。朱雀院の臣下が葵に取り憑いた物怪の正体を巫女に探らせると、身分の高そうな女が現れ、源氏の愛を失った恨みを述べて葵上を責める。横川の小聖が祈祷を行うと六条御息所の生霊が鬼形となって現れるが調伏される。

#### ④ へ野宮

金春禅竹作か。三番目物。五流の現行曲。「賢木」巻を典拠とする。旅僧が嵯峨の野宮の旧跡を訪れて、出会った女から光源氏と六条御息所との話を聞く。弔いをする僧の前に六条御息所の霊が現れ、賀茂の祭りでの車争いの事などを語り、妄執を晴らしてくれるよう願って舞を舞う。

#### ⑤ へ住吉詣

作者不明。四番目物。観世・金剛・喜多流の現行曲。「滯標」巻を典拠とする。須磨から帰京を果たしたお礼に光源氏一行が住吉社に参詣すると、須磨で契った明石の上一行も偶然に住吉社を訪れる。酒宴となって二人は相舞を舞い、やがて名残を惜しみつつ別れる。

#### ⑥ へ玉鬘

金春禅竹作か。四番目物。五流の現行曲。「玉鬘」巻を典拠とする。旅僧が初瀬川を訪れて小舟を操る女と会い、名所の二本の杉に導かれて玉鬘の物語を聞く。僧が回向をしていると玉鬘の霊が現れ、妄執による狂乱の様子を見せるが、昔を懺悔して成仏を遂げる。

⑦ 〈落葉〉

作者不明。三番目物。金剛流の現行曲。「若菜・柏木」巻を典拠とする。旅僧が小野の里を訪れると、女が現れて僧を落葉の宮の旧跡へと案内する。女が落葉の宮の霊であると明かして姿を消したので、僧が回向をしていると、落葉の宮の霊が現れて、夕霧との恋を回想しながら舞を舞って姿を消す。

⑧ 〈浮舟〉

横越元久作詞・世阿弥作曲。四番目物。観世・金春・金剛流の現行曲。「浮舟・蜻蛉・手習」巻を典拠とする。旅僧が宇治の里で女と出会い、浮舟と薫中將の話聞く。僧は小野へ行き浮舟を吊っている、浮舟の霊が現れて入水の様子などを語って姿を消す。

⑨ 〈須磨源氏〉

世阿弥改作か。四・五番目物。金春流以外の現行曲。「須磨・明石」巻などを典拠とする。日向宮崎の社官藤原興範が伊勢参宮の途中に須磨の浦に立ち寄り、所の老翁より光源氏の話を聞く。老翁が光源氏の化身と名乗って姿を消すと、やがて光源氏の霊が現れて颯爽と舞を舞う。

● 〈源氏供養〉

作者不明。三番目物。五流の現行曲。「源氏物語表白」を典拠とする。安居院の法印が石山寺へ向かう途中に琵琶湖の辺で女と出会う。女は源氏物語について語り、紫式部の霊と明かして姿を消す。法印が石山寺を訪れると紫式部の霊が現れ、供養を願って舞う。

源氏物語の夕顔

【夕顔とは】

三位中將の娘。玉鬘の母。頭中將の体験談によれば、親と死別後、頭中將が通うようになり女子（玉鬘）をもうけたが、正妻方におどされ、娘を伴って姿を隠したという。五条の大式の乳母を見舞った光源氏と夕顔にまつわる歌を贈答、互いに身分を隠したまま源氏が通うようになる。源氏に荒れ果てた某の院まで伴われ、自身の素性は語らないまま、物の怪に憑かれて急死。亡骸は東山に運ばれ葬られる。源氏の侍女となった右近によれば、夕顔は頭中將の正妻方におどされて西の京の乳母のもとに隠れ住んだ後、五条の家に仮住まいをしていたのだという。源氏によって四十九日の供養が行われた。法事のある夜、源氏の夢に現れる。源氏は後までその死別を残念に思い、遺児玉鬘は九州下向を経た後に源氏に養女として迎えられる。  
(大和書房『源氏物語辞典』による)

【あらすじ】

源氏十七歳の夏、六条御息所のもとへ通う途中、五条に住む大式の乳母を見舞う。夕顔の花が咲く隣家の風情に興味を持った源氏が花を所望すると、その家の女童が扇に花を載せて差し出す。扇に記された歌に心引かれた源氏は乳母子の惟光にこの家の女（夕顔）の素姓を調べさせる。

夕顔が頭中將（源氏の正妻葵上の兄）と関係があるらしいと知った源氏は、惟光の手引きで互に身分を隠したまま夕顔と関わりを持つようになる。八月十五日の夜、源氏は夕顔の狭い家で一夜を明かし、夕顔を某院へと誘う。その夜、源氏は奇怪な夢を見るが、目覚めると夕顔は息絶えていた。

密かに夕顔の葬送を済ませた源氏だったが、その悲しみから重い病となる。ようやく病が癒えた源氏は、夕顔が頭中將の忍び通った女であり、三歳の娘（玉鬘）がいることを知った。

【源氏は隣家の夕顔の花を所望する】

六条わたりの御忍び歩きのところ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大式の乳母のいたくわづらひて尼になりけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は半葎四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地する。いかなる者の集へるならむと様変りて思さる。

御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は葎のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にも申す」と独りごちたまふを、御隨身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしうちよろほひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる出で来てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、「これに置きてまゐらせよ、枝も情なげなめる花を」とて取らせたれば、門あけて惟光朝臣出で来たるして奉らす。

「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。ものあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」とかしこまり申す。……

修法など、またまたはじむべきことなどおきてのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたるもあてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにかしうおぼえたまふ。……

御畳紙にいたうあらぬさまに書きかへたまひて、

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔  
ありつる御隨身して遣はす。

【源氏は夕顔を某院へと誘ふ】

明け方も近うなりにけり。鶏の声などは聞こえて、御岳精進にやあらん、ただ翁びたる声に額づくぞ聞こゆる。起居のけはひたへがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露にことならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにかと聞きたまふ。南無当来導師とぞ拝むなる。「かれ聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」とあはれがりたまひて、

優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな

長生殿の古き例はゆゆしくて、翼をかはさむとはひきかへて、弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼めいとちたし。

前の世の契り知らるる身のうさに行く末かねて頼みがたさよ  
かやうの筋なども、さるは、心もとなかめり。

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲  
がくれて、明けゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて、軽ら  
かにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。そのわたり近きなにがしの院におはしまし着きて、預り  
召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けき  
に、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。「まだかやうなることをならはざりつるを、  
心づくしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめの道  
ならひたまへりや」とのたまふ。女恥ぢらひて、

「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの心ならひならんとをか  
しく思す。……

## 能へ夕顔

※現行観世流謡本による。ワキの詞章は現行下掛宝生流謡本による。

「 小段名。 二コトバ。 三フシ。

前シテ―里女

後シテ―夕顔上

ワキ―旅僧

ワキツレ―従僧（二人）

アイ―所の者

第一段 ワキの登場 旅僧が豊後の国から都の五条あたりへとやって来る

「名ノリ」 ワキ「是は九州豊後の国より出でたる僧にて候、扱も松浦箱崎の誓ひも勝れたりとは申  
せども、なほも名高き男山に参らんと思ひ、この程は都に上り、洛陽の名所旧跡一見仕りて候、今日  
も又立ち出で、仏閣に参らばやと思ひ候

「サシ」 ワキ『尋ね見る都に近き名所は、まづ名も高く聞えける、ワキ・ワキツレ『雲の林の夕日  
影、映るふ方は秋草の、花紫の野を分けて

「上歌」 ワキ・ワキツレ『賀茂の御社伏し拝み、賀茂の御社伏し拝み、糺の森もうち過ぎて、帰る  
宿りは在原の、月やあらぬと啣ちける、五條わたりの破屋の、主も知らぬ所まで、尋ね訪ひてぞ暮ら  
しける、尋ね訪ひてぞ暮らしける。

「着キゼリフ」 ワキ「不思議やなあ東屋より、女の歌を吟ずる声の聞え候、是に相待ち委しき事  
をも尋ねばやと思ひ候

第二段 シテの登場 里女が現れて悟りを求める思いを述べる

「下ノ詠」 シテ『山の端の、心も知らで行く月は、上の空にて影や絶えなん

「クリ」 シテ『巫山の雲は忽ちに、陽台の下に消え易く、湘江の雨は屢々も、楚畔の竹を染むるとかや

「サシ」 シテ『此処は又もとより所も名を得たる、古き軒端の忍草、忍ぶ方々多き宿を、紫式部が筆の跡に、ただ何某の院とばかり、書き置きし世は隔たれど、見しも聞きしも執心の、色をも香をも捨てざりし

「下歌」 シテ『涙の雨は後の世の、障りとなれば今もなほ。

「上歌」 シテ『つれなくも、通ふ心の浮雲を、通ふ心の浮雲を、払ふ嵐の風のまに、真如の月も晴れよとぞ、虚しき空に仰ぐなる、虚しき空に仰ぐなる。

第三段 ワキ・シテの応対 この場所が何某の院であることを知った旅僧は源氏物語の事を訊ねる

「問答」 ワキ「いかに是なる女性に尋ね申すべき事の候 シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ ワキ「此処をば何処と申し候ぞ シテ「これこそ何某の院にて候へ ワキ「不思議やな何某の山何某の寺は、名の上のただ仮初の言の葉やらん、又それをその名に定めしやらん、承りたくこそ候へ シテ「さればこそ初めより、むつかしげなる旅人と見えたれ、紫式部が筆の跡に、ただ何某の院と書きて、その名をさだかに顕さず、然れども此処は古りにし融の大臣、住み給ひにし所なるを、その世を隔てて光君、『また夕顔の露の世に、上なき思ひを見給ひし、名も恐ろしき鬼の形、それもさながら苔むせる、河原の院と御覽ぜよ ワキ』嬉しやさては昔より、名におふ所を見る事よ、「我等も豊後の国の者、その玉鬢の所縁とも、なして今また夕顔の、露消え給ひし世語りを、『語り給へや御跡を、及びなき身も申はん

第四段 シテの物語 里女は光源氏と夕顔の出会いや夕顔の死の様子を語って姿を消す

「クリ」 シテ『そもそも光源氏の物語、言葉幽玄を本として、理浅きに似たりといへども 地『心菩提心を勧めて義殊に深し、誰かは仮にも語り伝へん。

「サシ」 シテ『中にもこの夕顔の巻は、殊に勝れてあはれなる 地『情の道も浅からず、契り給ひし六條の、御息所に通ひ給ふ、よすがに寄りし中宿に シテ『ただ休らひの玉鉾の 地『便に立てし御車なり。

「クセ」 地『物の文目も見ぬ辺の、小家がちなる軒の端に、咲きかかりたる花の名も、えならず見えし夕顔の、折すごさじと徒人の、心の色は白露の、情置きける言の葉の、末をあはれと尋ね見し、閨の扇の色異に、互に秋の契りとは、なさざりし東雲の、道の迷ひの言の葉も、この世は斯くばかり、儂かりける蛸の、命懸けたる程もなく、秋の日や早く暮れ果てて、宵の間過ぐる古里の、松の響きも恐ろしく シテ『風に瞬く燈火の 地『消ゆると思ふ心地して、あたりを見れば烏羽玉の、闇の現の人もなく、如何にせんとか思ひ川、うたかた人は息消えて、帰らぬ水の泡とのみ、散り果てし夕顔の、花は二度咲かめやと、夢に來りて申すとて、ありつる女も、かき消すやうに失せにけり、かき消すやうに失せにけり。

第五段 アイの物語 所の者が現れて旅僧に夕顔の話を語る

第六段 ワキの待受 旅僧は夜通し読経を行う

「上歌」 ワキ・ワキツレ『いざさらば夜もすがら、いざさらば夜もすがら、月見がてらに明しつつ、

法華読誦の声絶えず、巾ふ法ぞ誠なる、巾ふ法ぞ誠なる。

第七段 後シテの登場 夕顔上が現れてさらなる巾いを願う

「サシ」 シテ『さなきだに女は五障の罪深きに、聞くも気疎き物怪の、人失ひし有様を、現す今の夢人の、跡よく巾ひ給へとよ』

第八段 ワキ・シテの応対 夕顔上と旅僧は何某の院の物寂しい様子を嘆く

「掛ケ合」 ワキ『不思議やさては宵の間の、山の端出でし月影の、ほの見え初めし夕顔の、末葉の露の消え易き、本の雫の世語を、かけて顛し給へるか シテ『見給へ此処も自づから、気疎き秋の野らとなりて ワキ『池は水草に埋もれて、古りたる松の蔭暗く シテ『また鳴き騒ぐ鳥の嗶声身に沁み渡る折からを ワキ』さも物凄く思ひ給ひし シテ『心の水は濁江に、引かれてかかる身となれども』

第九段 シテの舞事 夕顔上は光源氏が詠んだ和歌を口ずさんで舞を舞う

「ワカ」 シテ『優婆塞が、行ふ道をしるべにて 地』来ん世も深き、契り絶えずな、契り絶えずな 【序之舞】

第十段 結末 夕顔上は巾いによって成仏できたことを喜びつつ去っていく

「ノリ地」 シテ『お僧の今の、巾ひを受けて 地』お僧の今の、巾ひを受けて、数々嬉しやと シテ『夕顔の笑の眉 地』開くる法華の シテ『英も 地』変成男子の、願ひのままに、解脱の衣の、袖ながら今宵は、何を裏まんと、言ふかと思へば、音羽山、嶺の松風、通ひ来て、明け渡る、横雲の、迷ひもなしや、東雲の、道より法に、出づるぞと、暁闇の、空かけて、雲の紛れに、失せにけり。

## 能へ夕顔の小書

### 【山ノ端之出】

最初に藁屋の作り物が舞台に出される。第一段のワキ・ワキツレの「上歌」が終わると、シテが藁屋の中で「下ノ詠」「山の端の…」と謡い出し、作り物の引き回しを下ろす。その後、ワキが「着キゼリフ」の「不思議やな…」を謡い、さらにシテの「クリ」へと続く。

### 【法味之伝】

第八段「掛ケ合」の「引かれてかかる身となれども」の後にイロエが入り、第九段の序之舞がなくなる（舞うこともある）。第九段「ワカ」の「契り絶えずな」の後の囃子のアシライで下居して合掌する。